

## 百聞は一見にしかず：GET BACK

飄

々

広報委員

吉川 功一

広報委員の duty である「飄々」の原稿を書き始めて早6回目になります。そろそろビートルズ以外の気の利いた文章でも書かねばと思いましたが、昨年末にビートルズファンとしては外せないエポックメイキングな出来事があったので、今回もビートルズで行かせていただきます。

そのエポックメイキングな出来事とは、昨年11月25日よりDisney+で配信公開されているドキュメンタリー映画「GET BACK」です。これは、ビートルズのラストアルバム「LET IT BE」の約1か月に及ぶレコーディングセッションの一部始終を記録した57時間以上の未公開映像と150時間以上の未発表曲音源を元に、新たに作成された全3部・合計7時間47分にもおよぶ超大作新作ドキュメンタリー映画です。普通の人ならばとてもじゃないけど8時間近いドキュメンタリーなんて見てられないでしょうが、ビートルズのコアなマニアであればあるほど驚きと感動の連続で、瞬きなしで見てしまうほどの素晴らしい作品なのであります。解散後50年以上経過しているにもかかわらず、いまだに毎年なんらかの作品が発売され続けるビートルズですが、今回の映画は1995年のアンソロジープロジェクト（解散後初めてのポール、ジョージ、リンゴによるジョン作曲の新曲とビートルズの未発表曲などを一気に発売したプロジェクト）以来の衝撃的な出来事だと感じています。何がそんなに衝撃的なのか？理解していただくには少々予備知識が必要です。

ビートルズのラストアルバムは1970年発売の「LET IT BE」ですが、実はそのレコーディング（通称Get Back session）は、1969年夏に発売された横断歩道のジャケットで有名なアルバム

「ABBEY ROAD」よりも前の1969年1月に行われています。つまり「LET IT BE」はいったんはお蔵入りしてしまっていたアルバムなのです（原題「GET BACK」）。その経緯を説明すると・・・1966年にライブ活動をやめてしまったビートルズでしたが、1968年ともなるとメンバー間の不和が目に見えて増してきて結束力も弱まってきたことから、ポールがメンバーの結束・意欲を高めるために、1968年発売のアルバム「The Beatles」（通称：ホワイトアルバム）の楽曲を初心に戻って聴衆の面前で演奏してライブ復帰するアイデアを提案したことに始まります。しかしどうせならば、また別に新曲をつくり、そのリハーサル風景から盛大にライブ復帰するまでの様子を撮影してドキュメンタリー形式のテレビ特番にする、というアイデアにかかりました。1969年1月2日、ロンドンのトゥイッケナムスタジオに集結したメンバーはリハーサルを開始します。しかし、いつどこでどのような形でライブを行うのかあやふやなまま計画は迷走し続けます。撮影監督のマイケル・リンゼイ・ホッグはリハーサルの一部始終を録音・撮影する方針をとったため、メンバーはプライベートな会話までもがすべて録音されていることにフラストレーションを覚え、メンバー間のいざこざ、ケンカは絶えることなく、演奏も散漫で、1月10日には限界に達したジョージがグループを脱退してしまうというトラブルまで起こります。その後3人の説得でなんとかジョージは復帰し、雰囲気悪いトゥイッケナムスタジオからアップルスタジオに場所を移してリハーサルを続けますが、結局聴衆の面前でライブを行うというアイデアは頓挫したまま時間だけ

が過ぎていきます。なんとかこの状況にケリを付けるために、1月30日にアップルスタジオのあるビルの屋上で突然、事前予告なしのゲリラライブを行い、無理矢理プロジェクトを終わらせる形でGet Back sessionは幕を閉じます。結局、予定していたテレビ特番は完成することはなく、せめて残された音源をアルバム「GET BACK」として発表するべくミキシングまで行いましたが納得のいく作品にはならず、そのままお蔵入り。しかし、こんな惨めな終わり方はしたくないというポールの声かけで、Get Back sessionで得られたものはいったん捨て去り、最後にみんなでもう一度素晴らしい作品を残そうということになり新たにアルバム制作を開始、それが名作アルバム「ABBEY ROAD」となるのです。アルバム「ABBEY ROAD」でやり尽くしたメンバー達はその後個々の活動に打ち込みグループとしての活動はほとんど無くなります。その後、1970年になり、1年以上放置され続けていた未完成アルバム「GET BACK」は、ジョンが連れてきたプロデューサーのフィル・スペクターによりゴテゴテと派手なオーケストレーションなどが加えられ、アルバム「LET IT BE」と名も変えて陽の目を見ることとなります。しかしそれらの作業の多くはポールの意向を無視して行われたため、ポールはそのアレンジに激怒、1970年4月についてポール脱退宣言に至りビートルズは解散してしまいます。またGet Back sessionでテレビ特番用に撮影されたものの放置されたままとなっていた大量の映像は、メンバーの協力もほとんどないままビジネスを優先して1時間半に無理矢理編集され、映画「LET IT BE」として1970年5月に劇場公開されたのでした。しかし、解散直後という時期に公開されたこと、内容に言い争いのシーンなども含まれていたこともあり、メンバーが互いを罵り合いロックバンドが解散していく最後の悲惨な姿を捉えた映画として暗く悲壮感漂う作品となり、レコード会社・映画会社にとってドル箱であるビートルズの映画であるにもかかわらず、いまだに再上映なし、公式ソフト発売さえ行われていないのです。

以上、お読みいただいで分かりますとおり、Get Back sessionといえば、ビートルズファンにとっ

ては暗い、悲しいセッション「だった」のです。解散から50年以上それが「定説となっていた」のです。なぜ過去形なのか？実はそこが今回の新作ドキュメンタリー映画「GET BACK」のエポックメイキングたるゆえんなのであります。つまり・・・今回の映画を見ると、実はGet Back sessionは全然暗くもない、楽しい生き活きとした場面も多数含まれるセッションだったことが判明するのです！確かにジョージが一時脱退したり、メンバー同士が言い争いをする場面もありますが、実はそれを遙かに凌駕する明るい場面の連続だったのです。確かにだらだらと散漫な演奏も目立ちますが、突如としてとてつもないよい演奏を繰り広げてビートルズの実力を見せつけたりするのであります。かつての定説で頭が凝り固まっていた古参のファンであればあるほど、ディープなファンであればあるほど、これほど楽しめる映画はありません。目から鱗が落ちまくり、床は鱗だらけ、8時間以上全く退屈に感じることもなく楽しめてしまいます。そして、ただ楽しいだけではありません。次々と今までの定説が覆される実に痛快な作品となっています。

Get Back sessionではとにかくジョンのやる気が無くポールが一人で空回りするというのが今までの定説でしたが、実は全くそんなことはなく、ジョンも意外や意外、やる気満々な場面が満載、最後のルーフトップライブもむしろポールが消極的で、ジョンはやる気満々だったりします。しかしもちろん始まってしまえばポールもノリノリ、全員素晴らしい演奏を見せてくれます（格好イイなんて言葉では言い表せない格好ヨサ）。ロンドンのビジネス街で予告なしにあのビートルズが突然大音響で生演奏を繰り広げるのですから、私がおの場にいたらきっと卒倒していたことでしょう。

キーボードで急遽参加したビリー・プレストンもメンバー間の緊張感をほぐすためにジョージが連れてきたというのが定説でしたが、実はなんでも直感的に動いてしまうジョンが、たまたま遊びに来たビリーを思いつきで無理矢理誘って参加させたということが判明、その流れも実にジョン的で驚きとともに妙に納得してしまいます。ビートルズの名プロデューサー、ジョージ・

マーティンはメンバー間の争いに嫌気がさして Get Back session には関わろうとせずぼぼノータッチだったとされていましたが、実は欠かさず連日セッションに参加、このプロジェクトのプロデュースをグリーンジョーンズに任せて彼を温かく見守り、スーパーバイズする大役を果たしているなどなど、常識がひっくり返る場面は挙げればキリがありません。とにかく旧作映画「LET IT BE」ではほとんど見られなかったメンバーのノリノリな演奏、和気藹々とした光景は驚きと感動で目が離せません。

・・・失礼しました、文字で書いていても少しコーフンしすぎました(笑)。

相当ディープなファンでないとこの感動は味わえないのかもしれませんが、しかし今回この映画を見て、改めて「百聞は一見にしかず」の言葉を

噛みしめたのでありました。とてもベタではありませんが、やはりいくら定説といわれていることであっても真の姿は十分な資料を自分の目と耳でしかと確かめねば分かりません。また、間違った歴史を一度本などに記録されてしまうと、それは下手をするとずっと正しい情報として後世まで残ってしまうことの重要性、危うさに改めて気付かされました。実は今、宇部市医師会100周年記念誌作成委員として記念誌の編集に関わらせていただいているのですが、まさにその心境で臨まねばならないと、襟を正して作業にいそしむ今日のごろなのであります。

以上、超大作新作ドキュメンタリー映画「GET BACK」のお話でしたが、この予備知識を持ってご覧になればきっと楽しめると思います。みなさまも8時間(笑)ご覧になってみてはいかがでしょうか？



写真：ドキュメンタリー映画「GET BACK」をじっくりご覧になった方にはピンと来るかもしれない品々を集めてみました。分かる人にしか分からない・・・しかし分かったあなたは相当なマニアです。